

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520487

研究課題名（和文）句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）Asymmetry and Linearization of Phrase Structures and Structural

Dependency: A Theoretical and Empirical Study

研究代表者

木村 宣美（KIMURA NORIMI）

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：90195371

研究成果の概要（和文）：

Right Node Raising (RNR) 構文には2種類のRNR構文が存在し、削除に基づく分析と多重支配に基づく分析の両方を仮定しなければならないことが示された。右方転移 (Right Dislocation: RD) 文には2種類のRD文が存在し、左方移動の適用により生成されるとする移動分析と削除に基づき導かれるとする「省略文」+「繰り返し文」に基づく分析の双方の分析が必要であることが示された。これは、異なる線形化のメカニズムが存在することを示唆している。

研究成果の概要（英文）：

We have two kinds of Right Node Raising (RNR) structures: an RNR structure which is derived by deletion, and a multi-dominance structure. We have two types of Right Dislocation (RD) sentences: one derived by leftward movement, and the other derived by deletion. This means that we have different linearization mechanisms.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：非対称性、線形化、右方移動、左方移動、等位構造、削除、多重支配、情報構造

1. 研究開始当初の背景

Kayne (1994)は、反対称性(antisymmetry)の観点から、終端記号の線形順序(linear order)と支配関係(dominance relation)に密接な関係があることを主張する、Linear Correspondence Axiom: LCA)を提案した。また、Pesetsky & Fox (2003, 2005) は、論文

Cyclic Linearization of Syntactic Structure や Cyclic Linearization and the Typology of Movement において、循環的線形化の研究を推進している。これらの研究は、Chomsky (1999)の Derivation by Phase に基づく研究で、概略、フェイズ(phase)ごとに線形化がなされて語順が確定し、その後の語順変更は一切許

されないとする提案である。しかしながら、線形化のメカニズムが具体的にどのようなものか等、そのメカニズムの精緻化が必要であることを、木村宣美(2005)「右枝節点線上げの特異性」弘前大学人文学部『人文社会論叢(人文科学編)』第14号や木村宣美(2005)「右枝節点線上げ:全域適用(ATB)に基づく分析」中部言語学会 *Ars Linguistica* 12で指摘した。また、線形化の原理(principles of linearization)の精緻化は、第27回日本英語学会(2009)(大阪大)や第32回 GLOW Colloquium 2009(Nantes)で取り上げられる等、言語学的に解明されなければならない重要な問題であった。

2. 研究の目的

【概要】

Minimalist Program (Chomsky 1995) の枠組みにおいて、右枝節点線上げ(Right Node Raising: RNR)、副詞(respective/respectively, betubetuno)のスコープ解釈、数量詞遊離(Quantifier Float)、結果節の外置(Result Clause Extraposition)、重名詞句転移(Heavy NP Shift)、右方転移(Right Dislocation)等の右方移動(rightward movement)構文の理論的・実証的研究を通じて、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係のメカニズムを解明することにある。

【これまでの研究成果】

(1) 右枝節点線上げ: 右枝節点線上げに関して、①音声形式(phonetic form: PF)部門での削除(deletion)分析、②移動(movement)分析、③多重支配(multi-dominance)分析が提案されているが、木村(2005, 2006)では、右枝節点線上げ(RNR)構文の派生過程及び RNR 要素の位置に対して、RNR 構文の非移動分析(Kimura 1985, 1986): RNR 要素は、線上げられるのではなく、一番右側の被接続要素内にある、RNR 構文の SPELL-OUT の構造は、Williams 1978 の全域適用(across-the-board: ATB) format で生成され、音声形式(PF)部門で Kayne (1994)の LCA に基づき因子化された構造が線形化されることを明らかにした。この研究により、対称的述語(symmetric predicates)が RNR 要素として生起する RNR 構文の構造的依存関係を適切に分析することが可能になることが示された。また、RNR 構文の移動分析を支持する特性と非移動分析を支持する特性は、ATB format で生成された構造への規則適用に伴う統語的特性と PF で適用される線形化に伴う音声的特性に明確に峻別できることも示された。

(2) 数量詞遊離の構成素性: 木村(2003)では、遊離数量詞構文の遊離数量詞とそれが修飾する名詞句の構成素性(constituency)を考察し、①名詞句+格助詞+数量詞(あるいは副詞)から成る連鎖は、名詞句・動詞句あるいは節という構成素を成し、範疇に着目することにより、川添(2002)が区別する帰一連鎖と非帰一連鎖を統一的に扱うことができる。帰一連鎖とは、構成素としての名詞句で、非帰一連鎖とは、構成素としての動詞句あるいは節である。②Koizumi (2000)の顕在的動詞上昇(overt verb raising)を仮定することで生じる構造的な多義性が克服され、神尾(1977, 1983)が提案するように、2種類の遊離数量詞の構成素性を認める構造的依存関係を仮定する必要があることを明らかにした。

(3) 結果節の外置: 木村(2003)では、結果節の外置構文(so...that 構文)の構造的依存関係に考察を加え、Gueron & May (1984)では区別されることなく同等に扱われている(1a, b)の違いを明らかにした。(1) a. I ate so much food (that) I was almost sick. b. He saw so many new things he couldn't remember them all. (1a, b)の違いは、(1b)には名詞句 so many new things と代名詞 them が同一指示ではない場合と同一指示である場合があるということに起因する。島からの抜き出し・分離先行詞(split antecedent)に関して、(1a)のような典型的な結果節の外置構文との比較から、(1b)のような、主節の so が修飾する名詞句(so 表現)と同一指示である代名詞を従属節内に含む so...that 構文は関係詞節の外置構文であり、so と that に構造的依存関係のある結果節の外置構文と峻別しなければならない。

【研究成果の発展】

木村宣美(2006)『数量表現の構造的依存関係に関する理論的・実証的研究』(平成15年度-平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号15520302)では、最近の RNR 構文の分析(特に PF 部門での削除分析)では、対称的述語が RNR 要素として生起する現象を適切に分析することができないことが明らかとなった。この成果を踏まえて、Phase レベルでの線形化がどのように定式化されるかという問題に関して、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係との関連で考察を加えることが、言語学的に有意義な成果を生み、普遍文法の構築に貢献できる可能性があると考えに至った。また、遊離数量詞の構成素性と等位構造の研究から、統語構造の構成素性を明示的に定義することで、右枝

節点繰上げ、左枝節点繰上げ、副詞のスコープ解釈、数量詞遊離に対して妥当な分析を提案することができるとの着想に至った。また、結果節の外置の研究を通じて、RNR 構文と同様に、結果節の外置構文と分離先行詞及び重名詞句転移、右方転移の問題を適正に分析するためには、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係の関係に対して考察を更に加えることが重要であるとの着想に至った。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、基本的な資料の収集及び包括的・網羅的な記述に基づき、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係の把握【等位構造あるいは等位構造以外が関与する右方移動の調査・記述】【本研究で得られた知見による句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係の検証及び句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係の精緻化】の手順を踏み、研究代表者のみで展開される本研究において、当初計画どおりに進まないことがないように、研究を実施する様々な段階で批判的な検証作業を行いながら、着実に研究を遂行する。

・研究計画

(1) 平成 22 年度

① Williams (1978), Kayne (1994), Nunes (2004), Pesetsky & Fox (2003, 2005)等が提案する線形化と構造的依存関係について概観し、その妥当性を批判的に検証する。

② Kayne (1994)が提案する、句構造の非対称性と構造的依存関係について概観し、その妥当性を批判的に検証する。

③ Williams (1978)が提案する全域適用 (across-the-board: ATB)分析と構造的依存関係について概観し、批判的に検証する。

(2) 平成 23 年度

① RNR や副詞のスコープ解釈等の等位構造が関与する右方移動の諸特性の包括的な調査及び記述に努め、それぞれの構文の特徴を抽出する。

② Kayne (1994), Nunes (2004), Pesetsky & Fox (2003, 2004)等が提案する線形化の分析を、①の等位構造に関与する右方移動の諸特性に基づき、批判的に検証する。

③ Williams (1978)が提案する全域適用分析を批判的に検討し、①の等位構造に関与する右方移動の諸特性に基づき、改訂された ATB 分析の妥当性を検証する。

(3) 平成 24 年度

① 平成 22 年度-平成 23 年度の研究成果に基づき、等位構造が関与しない右方移動、結果

節の外置、数量詞遊離、重名詞句転移、右方転移等の諸特性の包括的な調査及び記述に努め、それぞれの特徴を抽出する。

② 等位構造が関与する右方移動[RNR、副詞のスコープ解釈]に関する句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係について得られた知見が、等位構造が関与しない右方移動[結果節の外置、数量詞遊離、重名詞句転移、右方転移等]の句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に対しても同様に適用できるのか、その妥当性を検証する。

③ 句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係の統語論・意味論的類似点及び相違点に基づき、先端的言語理論を構築するため、一般原理と普遍文法のパラメータ設定の可能性を考察する。

④ 国外の最先端の研究動向を調査し、本研究課題に関して意見交換し、国際学会で研究成果を発表するために、海外出張 (アメリカ合衆国) を計画している。

・研究方法

【平成 22-24 年度】

(1) 収集された基本的な資料 (句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係に関わる言語学書、等位構造及び等位構造以外の右方移動に関わる言語学書、言語学関連雑誌、言語学会機関誌、博士論文等) から、右枝節点繰上げ(RNR)、副詞のスコープ解釈、数量詞遊離、結果節の外置、重名詞句転移、右方転移等の特性を見極め、包括的・網羅的に記述する。

(2) (1)に加えて、文献で従来扱われてこなかったデータも言語分析の資料とし、より包括的な言語現象の記述に努めなければならない。より多くの言語事実を集め、広い範囲にわたり、より妥当な分析を提案するために、日本語に関しては、まず初めに、私の日本語に関する内省的言語直観により、例文の文法性についての判断を行い、次に、他の日本人にも判断をあおぎ、多くの例文を集める。英語に関しては、例文の判断を英語の母国語話者にあおぎ、言語事実の収集に努める。

(3) (1)及び(2)の過程で収集されたデータに基づき、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係の言語間の違いを比較し、その統語論・意味論的類似点及び相違点を抽出する。

(4) (1)-(3)の過程を通じて抽出された統語論・意味論的類似点及び相違点を綿密に比較・検討し、その背後に潜み、そのような類似点・相違点を支配・統率している一般原理

を探る。

(5) (1)-(4)の句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係の比較研究を通じて得られた成果が、言語理論の構築に、どのように反映されるべきであるかを考察し、英語以外の言語の非対称性・線形化と構造的依存関係の関係をも捉えることができるか、検証する。

(6) 様々な言語の句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係のメカニズムを解明し、普遍文法のパラメータを設定することに努める。

4. 研究成果

【平成 22 年度】

(1) 本研究の目的：右枝節点繰上げ(RNR)構文等の右方移動構文の理論的・実証的研究に基づき、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係のメカニズムを解明する。

(2) 本研究の具体的内容及び意義・重要性：RNR 構文には全域的 RNR 構文と対称的 RNR 構文が存在し、2 種類の構造・派生過程・線形化のプロセスを有する構文であることを示した。

①RNR 要素の生起位置及び RNR 構文の派生過程：(i) RNR 構文の in-situ 分析：RNR 要素は、一番右側の被接続要素内の元々の位置にある。(ii) RNR 構文の ex-situ 分析：RNR 要素は、すべての被接続要素に多重に支配されている。

②仮説(i)-(ii)を組み込んだ分析の妥当性：RNR 構文が、(a) 島の条件に従わない、(b) 動詞句削除の先行詞として RNR 要素が含まれる、(c) 前置詞句からの抜き出しが（一見したところ）許される、(d) 適正束縛条件が課されない、(e) 束縛条件(C)が課されるという RNR 構文の諸特性は、RNR 要素が移動されることなく元々の位置に生起していることを示唆し、仮説(i)の妥当性を示している。また、(f) RNR 要素として対称的述語が生起する、(g) RNR 要素として分離先行詞が生起するという RNR 構文の諸特性は、RNR 要素が多重に支配されていることを示唆し、仮説(ii)の妥当性を示している。

③ 従来の RNR 構文の分析には、i) 移動分析、ii) 削除分析、iii) 多重支配分析が提案されている。このような従来の RNR 構文に対する分析とは異なり、本研究の独創的な点は、RNR 構文を適切に分析するためには RNR 構文の in-situ 分析と ex-situ 分析の両方を仮定しなければならないことを示したことにある。これは、異なる線形化のメカニズムが存

在することを示唆している。

【平成 23 年度】

(1) 本研究の目的：右枝節点繰上げ(RNR)等の等位構造が関わる右方移動現象の理論的・実証的研究に基づき、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係のメカニズムを解明する。

(2) 本研究の具体的内容及び意義・重要性：

① RNR 構文には全域的 RNR 構文と対称的 RNR 構文が存在し、一致効果が観察されるかどうかという観点で、3 種類の RNR 構文が存在することを明らかにした。(1) a. 全域的 RNR 構文 (RNR 構文の in-situ 削除分析)：一致効果が見られる場合 I'm interested in _ but rather apprehensive about their new proposal. b. 全域的 RNR 構文 (RNR 構文の in-situ 削除分析)：一致効果が見られない場合 Bill has to read two _ and Mary must write one essay by tomorrow. c. 対称的 RNR 構文 (RNR 構文の ex-situ 多重支配分析) I borrowed _ and my sisters stole _ a total of \$3000 from the bank.

② RNR 構文に課される右端制約 (Right Edge Restriction: RER)を満たすために重名詞句転移が適用されると仮定することで、Ince (2009)の分析とは異なり、トルコ語等の RNR 構文の適格性に説明が与えられることを指摘した。

③ 一致効果の欠如 (動詞形態、数詞と名詞の数の一致、範疇のミスマッチ、否定極性表現、再帰代名詞の先行詞)の現象に基づき、全域的 RNR 構文の RNR 要素が一番右側の等位項とのみ一致効果を示す場合があり、Citko (2011)の Parallel Merge に基づく多重支配分析には不備があり、全域的 RNR 構文の削除分析の方が優れていることを指摘した。

④ 日本語の逆行等位構造縮約構文は、空所化ではなく RNR で導かれる構文であることを明らかにし、英語と同様に、削除規則が適用されて導かれる構文であることを明らかにした。

【平成 24 年度】

(1) 本研究の目的：右方転移等の等位構造以外が関わる右方移動現象の理論的・実証的研究に基づき、句構造の非対称性・線形化と構造的依存関係のメカニズムを解明する。

(2) 本研究の具体的内容及び意義・重要性：

① 右方転移文の派生に対して、複合名詞句縮約・関係詞節の島の条件、付加詞条件、等位

構造制約、前置詞を残留させることを禁じる条件に従うが、上方制限が課されない、主節現象である、残余代名詞が生じる場合があるという右方転移の諸特性に基づき、動詞句前置/残余句移動等の左方移動(規則の適用により生成されるとする移動分析と削除に基づき導かれるとする「省略文」+「繰り返し文」)に基づく分析のいずれかではなく、移動と削除に基づく分析が必要であることが明らかにされた。

② 久野(1978)、高見(1995)、江口(2000)、中川・浅尾・長屋(2007)やNakagawa, Asao and Nagaya (2008)、綿貫(2012)等の先行研究を批判的に検証し、右方転移要素が旧情報を担っている場合のみならず、新情報を担っている場合が存在し、情報構造上、2種類の右方転移文が存在することが指摘された。

③ 2種類の右方転移文の構造は、単節構造と複合節構造とで異なるが、移動のメカニズムが係わる言語現象であり、「右方転移要素の前にポーズを伴わない場合」は単節構造に移動規則が適用されて導かれ、「右方転移要素の前にポーズを伴う場合」は複合節構造を構成し、後続する繰り返し文内の移動と削除に基づき生成されることが示された。

④ 主語名詞句や属格名詞句の右方転移が可能であり、右方転移文を派生する際の左方移動規則が、かき混ぜ(scrambling)であるのかに関して、更に詳細な研究が必要であることが示された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 木村宣美、右枝節点繰上げ：削除分析と多重支配分析、日本語学会第145回大会予稿集、査読有、第145号、2012、206-21
- ② 木村宣美、日本語の右方転移：移動分析と削除分析、人文社会論叢人文科学篇(弘前大学人文学部)、査読無、第28号、2012、1-11
- ③ 木村宣美、日本語の逆行等位構造縮約、人文社会論叢人文科学篇、査読無、第27号、2012、37-57
- ④ 木村宣美、全域的右枝節点繰上げ構文と削除分析、Ars Linguistica(日本中部言語学会)、査読有、第18巻、2011、17-35
- ⑤ 木村宣美、2種類の右枝節点繰上げ構文、人文社会論叢人文科学篇、査読無、第25号、2011、1-12

[学会発表] (計4件)

- ① 木村宣美、日本語の右方転移、日本中部言

語学会第58回定例研究会、2012年12月、静岡県立大学

- ② 木村宣美、右枝節点繰上げ：削除分析と多重支配分析、日本語学会第145回大会、2012年11月、九州大学箱崎キャンパス
- ③ 木村宣美、日本語の逆行等位構造縮約、日本中部言語学会第57回定例研究会、2011年12月、静岡県立大学
- ④ 木村宣美、2種類の右枝節点繰上げ構文、日本中部言語学会第56回定例研究会、2010年12月、静岡県立大学

[その他]

ホームページ等

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/jinbun/html/general/bulletin.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 宣美 (KIMURA NORIMI)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：90195371